

翌朝十時。

会社の机に就いた私は、いつも通りに与えられたコンピューターコンソールのスイッチを入れた。

ハードディスクが起動し、軽いマシンノイズが響く。CRTに社内LANの起動メニューが浮び上がった。

ボックスにはメールが二通届いていた。相手を確認すると、上司と同僚からである。「R」コマンドを入力する。

大抵の場合、同僚からのメールは、その内容が純粋に仕事の為のものであったとしても、どこか砕けた調子がある。去年導入されたばかりのメールシステムに順応しているせいだろうか。しかし上司からのものは、昔ながらの社内文章そのもので「紙」が「ファイル」に置き変わっただけといった趣がある。今回の上司からのメールもそんな調子のものであった。

その内容は、(今日十四時より小会議室で会議。議題は現在進行中のプロジェクトの中間報告)だった。例によって遅れ気味のスケジュールの言訳を、その上の上司に報告する為のネタ集めだ。

私は続けて同僚よりのメールを呼出す。発信時間を見ると今日の早朝になっていた。また徹夜したって訳だろう。

—— 眠い、死にそうだ、BUGが取れない(;) ——

—— 死にそうだが、昨日オマエが帰ってから仕入れた情報を教えてやろう、感謝するよ(;) —— この情報と引換えにこの前おごってもらったマクドはチャラだからな(;)。

—— 明日、いや今日だな、の十四時からまた例の「言訳ネタ集め」会議があるぞ、多分メールが来てたろ。まっ、会議はいつも通りの内容だろうけど、新人の紹介があるらしいぞ。しかも女性でこれがまた独身の美人だ(履歴書に張ってあった写真を見たんだよ(;)、

それで、この女性オマエが以前いた派遣会社でフリーやってたんだ、「お話し」のキツカケにピタリだろう、今回だけはこの前のマクドでのビックマックに免じて譲ってやるから感謝するよ(;)。 ——

じゃオレは今から帰って寝るからまた「会議」でな(´▽｀)――

徹夜明けの退屈さ故のメールってところだった。私は「D」コマンドを入力しファイルを消去する。

エディタを起動し未完成のプログラムファイル呼び出す。神経をエディタに向ける前に、私は薄いプラスチックの壁で区切られた隣のコンソールに目をやる。そこは数週間前に退職した同僚の席であった。メール通りに新人が来るとすればこの席に座る事になるだろう。

(独身で美人) 私は同僚からのメールに書かれた文章を思い出す。そしてそんな自分に自嘲気味の笑いをもらす。

視線をプログラムファイルに向ける。

小会議室はその名の通り(小)会議室であり、小さなテーブルと五脚ばかりの椅子、そしてコンピュータのCRTを直接表示できるプロジェクターが置かれた小部屋である。その主な使用目的は、内の同時進行している各プロジェクトグループ内の打ち合わせだ。

今回の私の参加しているプロジェクトのメンバーはSEである上司を含めて四名。私が属する課の上位プロジェクトの一モジュールの開発がその職務である。

時間通りに、私を含めて三名の同僚が集った。無駄口を叩く暇もなくドアが開き上司が入ってくる。メールの情報通りグレーのスーツ姿の女性をとまっていた。今朝私にメールをくれた同僚が私に目配せする。

「紹介しておこう、栗田 優香君だ。今日から今回のプロジェクトに参加してもらう」プロジェクトのSEである上司が隣に立つスーツ姿の女性を示して言った。

女性――優香――が軽く頭を下げる。

上司が優香の経歴を簡単に紹介していく。大学で情報処理を学び、在学中からプログラミングのアルバイトをはじめ、そして卒業後そのままフリーに。

フリーの人間にはありがちな経歴だが、女性と言う所が変わっているとえば変っていた、つまり優秀だと言えるのかもしれない。

上司の紹介後、優香が型通りの挨拶をはじめ。

確かに(美人)と言っても良い女性であった。ショートカットの髪に包まれたその顔つきは、強いて言えば、青年誌に登場する高橋留美子のキャラクター的美人と言ったところか。

挨拶を終えた優香が、上司に促されて私の隣の開いている椅子に座る。隣の私に会釈した彼女に、私は意味のない微笑で応じる。

ふとその時、微風に乗って彼女の着けている香水が微かに漂ってきた。私は反射的に優香を見る。

彼女の着けている香水は美佐子と同じものであった。

私は、その匂いに軽い欲情を覚える。

(まるでパブロフの犬だな……)

今日二回目の自嘲的な笑いを浮べながらも、私は退社後美佐子に電話する事を決める。いつも通りの会議がはじまった。

やはり彼女に与えられた席は私の隣のコンソールだった。

そして唯一スケジュールに余裕があった私が、教育係を命ぜられたのだ。仕事に一つの楽しみが加わった。

そして優香は、最初の印象どおり優秀であった。多分フリーの時代に似たような開発を行った事があったのだろう。新人が誰でもつまづく当社独自のサブライブラリーの取り扱ひも二、三の質問に答えると理解出来たようだった。彼女の採用を決めた上司に感謝しよう。

夕方、練習のつもりで与えた画面表示ルーチンの作成を彼女は終えた。

「これでいいよ。御苦労さま」

私はLANを通じて彼女のコンソールから呼出したプログラムファイルをチェックして言った。多少癖のあるコーディングだが指摘する程のものでもない。

「ありがとうございます」

優香が微笑を浮べる。今日はじめて見る、緊張感が感じられない微笑であった。

彼女の緊張は私にも覚えのあるものだった。フリーで仕事をしていた者が、組織に組みこまれて、初めて仕事をする時の自分に対する不安がその原因だ。もちろん、そんな不安をかけら程も抱かない者もいることはいるが。

私は回りを見渡す。同僚は二人ともコンソールから顔も上げずに仕事に没頭していた。今日の会議での上司の小言が効いたのだろう。

「本当なら歓迎会でもって所なんだろうけど、そんな雰囲気でもないみたいだから、又後日って事にして、今日は帰ってもいいよ」

私は回りの同僚を示して優香に言う。

「はい。じゃ皆さんお先に失礼します」

優香が最初は私に、そして次の言葉は同僚二人に対して言った。

私は簡単に後片付をすませた後、優香に十分程遅れて会社を出る。

別に彼女と一緒に退社しても良かったのだが、美佐子へ電話を掛ける予定があったのだ。特に気にする必要もないかもしれないが、私は何故かその事を優香に知られるのを避けたのだ。

私は彼女に、美佐子の事を悟られたくなかったのかも知れない。



適度なアルコールは媚薬と同様の効果がある。使い古された言葉ではあるが、私は今それを実感していた。

電話で呼出した美佐子と食事をし、繁華街から少し奥まった所にあるバーのボックス席に座ってから三十分。二杯目のバーボンのグラスが空く頃、私は隣に座る美佐子の肉体を強く意識していた。

うなじから肋骨にかけての柔らかなライン、適度な盛上がりを見せる胸、タイトなスカートに包まれた腰と、尻。それに続く軽く組まれた脚。その総てが私の欲望を刺激する。そしてなによりも、その肉体の背景に存在し、より私の欲望を掻きたてるものは、いつもの、つまり優香と同じ、彼女の香水の匂いだった。

飲んだアルコールの酔いが回りだしたのか、美佐子が私にもたれかかってくる。私は腕を彼女の肩に回し、その柔らかさと、一層強くなった香水の匂いを感じ取る。

「出ようか……?」

私は美佐子の耳に囁きかける。

美佐子が肯く。

お互いの腰に腕を回しながら私たちは夜の街を歩く。様々な人々が行きかう中を、私は腕に彼女の肉体を、その体温を、そして柔らかな身体を意識しながら歩く。

「どこ、行くの」

美佐子が尋ねる、吹きかかってきた微かなその息までが私を刺激した。

「公園だ……いやか?」

「外で?」

「そうだ、我慢も限界なんだ」

「はか……」

美佐子が了承の微笑みを浮べる。

公園の茂みの中の樹にもたれた美佐子が、私の身体に腕を絡めてきた。

私は彼女の首筋に顔を埋め、その香水と体臭を胸一杯に吸いこみながら、その胸をまさぐる。柔らかな乳房が手の中で歪み、そして微かな乳首の尖りを探りだしたとき、彼女の手が私の背中を撫ぜ下ろし、そしてその脚が腰に絡み付いてきた。

私は彼女のスカートの中に手を差しこむ。暖かくわずかに湿っているような感触がする太股の狭間に手を這わせ、ストッキングをずり下げる。下着の薄い生地ごしに秘部に指をはわすと、彼女の太股が開き、軽くあげた声が私の耳をくすぐった。

指をゆつくりと尻の狭間辺りから前に向けてはわして行くと、陰毛のざらつきの中に、快樂の尖りのぼつりとした盛上がりを感じ取る。

そこを中心にして、円を描くように愛撫していくと、美佐子が漏れる声を押し殺そうと私の首に唇を押し当てて来た。

私は彼女の下着に指をかける。

「ちよつと待って……」

美佐子が太股で私の手をはさみこむ。

「その前に……」

美佐子が腕をすり抜け、私と身体を入れ替える。樹を背中にした私に、彼女が微笑する。

「させて……」

美佐子の右手が、スポンの上から既に勃起している私の股間をまさぐりはじめる。

「今日は凄く燃えてるみたいね、何があったの」

それは質問ではなく断定だった。

「……いや……」

私は軽く否定する。

「……まあ、いいわ。白状させてあげるから」

美佐子が先程よりも深く微笑する。その妖艶さを滲ませる貌に、更に私は刺激される。

彼女がその場に座りこみ、私のスポンのチャックを下げる。

突き出てきた下着に包まれたままの剛直を両手で挟みこみ、手のひらで刺激しながら、彼女は亀頭の部分に唇を当てた。

彼女の手が竿の部分を押迫し、唇が動きはじめた時、私は剛直の中に生じた鈍い快感に、押し殺した息をつく。

彼女が、口紅で赤く汚れ、唾液によって湿った私の下着から剛直を取り出すと、開放された私
のものは、完全に勃起したその姿を夜気の中に突き立てる。

美佐子が私の昂ぶりを見詰める。

そのまま彼女は、湿った亀頭を包みこむように握りしめ、その親指で先端の窪みとその付近を
撫で回しはじめる。彼女の指の下から滲みだしてきた粘液が潤滑剤となり、苦痛にも似た鋭角的
な快感が私の下半身を駆巡る。

更に美佐子は、私の粘液で汚れた手を、開いたチャックから中に差し入れ、私の垂れ袋を撫で
回すように刺激しながら、唇から伸ばした舌で亀頭を舐めはじめ。その舌の動きは、私の見下
ろす視線を意識してか、見せ付けるかのように、淫らだ。

私は舌で愛撫を続ける美佐子の頭を掴み、剛直をその口内でより強く刺激させようとして引き
付ける。

美佐子が軽く亀頭に歯を立てた。鋭くそして甘い苦痛。

「だめよ、白状するまでは」

そして、微笑。

美佐子がもう片方の手で剛直の竿の部分握り締め、絡み付かせた指を巧みに動かし私を刺激
する。

快感によって滲み出した粘液が、彼女の舌との間で透明な糸となった。

数分後、私は限界に達する。

「解った、話す……よ」

美佐子が私の剛直を深く啜える。唇が快い圧力を加えながら、舌が亀頭と尿道を刺激する。

頬が窄まり強く吸い上げられた時、急激に快感が増す。今までの弱い刺激で、その直前の状態
で止められていた射精の衝動が一気に開放される。

私はその衝動のままに、彼女の頭を強く掴み、そしてその口内に多量の白濁を発する。

まだ快感の余韻に身体を硬直させる私の股間で、美佐子の喉が鳴った。

一旦射精を終えた私の剛直を美佐子は口に含んだまま、更に舐め続ける。敏感になった剛直に
は、少し強すぎる刺激だった。

私は反射的に彼女の頭に手をかけ、引離そうとする。しかし彼女は私の腰に手を回し、逆らい
ながら、舌を動かし続ける。

次第に快感が、苦痛に近い刺激を覆い隠しはじめる。私は背にした樹に体重をあずけ、彼女の
頭を掴んだ手の力を抜く。

視線を夜空に向けると、街の明りの中に没する事を拒んだ数個の星のみが、自分を主張するか

のように光の点を放った。

私の下腹部で美佐子が顔を前後に揺すり、更に刺激し続ける。

美佐子の口の中で私が再び力を取り戻すと彼女が立ち上がり、木にもたれかかったままの私と視線を合せる。

性的な興奮によって、彼女の瞳は妖しい光を湛えている。そう、先程見た都会の夜の星のように。

「私の番よ、して……」

そう囁いた彼女の息は栗の花の匂いがした。そしてその唇の口紅は剥がれている。

私は美佐子と身体を入れ替え、後ろ向きにした彼女に樹を掴ませる。

私に向かって突き出された腰のスカートを捲くり上げ、下着を一気に引き下ろす。

「あっ！」

性急な私の行動に、彼女が少し驚いたような声を上げる。しかし私に応じるように開かれた脚の間から覗く彼女の秘部は、夜目にもはつきりと濡れていた。

美佐子がさらに私に向けて腰を突き出す。私はその尻に手をはわし、狭間に指を差し入れる。

「自分で開いてみせろよ」

「えっ……？」

私は内側に曲げた中指を彼女の肉襞の奥に挿入する。濃い愛液が指にぬめり、手の平の下のもう一つの窄まりが蠢くと同時に、肉穴が締め付けてくる。

指を抜く。

「あっ……」

美佐子が声を上げる。

「尻を自分で開くんだ」

「……」

私の要求に応え、彼女は肩と首で身体を支えるようにして、両手を後ろに回し、尻を掴む。

私は先程の彼女に対する復讐心からか、更に追撃ちを掛ける。

「もっとだ、もっと開いて」

美佐子が自分の尻房を鷲掴みにする。柔らかな肉に爪が食いこみ、開かれた尻肉の狭間の二つの秘部が、その歪んだ形を私の目に晒け出す。

そんな私の視線に応えるかのように、彼女の広がった肉襞の奥からはたたりが漏れ、肉穴が息衝くかのように蠢く。

私は美佐子の下腹の方から手を回し、前から肉の芽を摘み上げ、もてあそぶように刺激し、そして後ろから剛直を挿入する。

「うう……」

美佐子が低く押し殺した快樂の声を上げる。

私は更に足を一步踏出し、剛直の付根がその挿入している肉穴の入口に触れるほど深く突き入れる。

美佐子が大きく息を吐き出す。

「深い、わ……」

彼女が、自分の尻を掴んでいる手に力を加える。わずかに開きを大きくした尻の狭間に、私は更に腰を押し進める。先端の尿道に丸く固い子宮の感触が触れる。

私は美佐子の肩を両手で掴み、腰を回すように動かして、前後運動をなるべく避けるようしながら、剛直全体で肉穴の内部を刺激する。ある部分に私が触れると、美佐子が耐え切れないように首を振り、切ない声を上げる。

私を受け入れている肉穴がもつと強い刺激を求め、まるで独立した一つの生き物であるかのように蠢く。

「白状するよ」

私はその刺激する動きを続けながら彼女に言う。

同時に私は、彼女と同じく快感を味わっていた。そしてそれは、美佐子に告白する事によって更に増していくようだった。

「今日会社に……新人の女性が……入ったんだ。彼女は君と同じ香水を着けていた。

俺はその……女性に……いや、香水にかもしれないな、欲情を覚えた……。今日は一日中、煮えたぎってたよ……」

私の台詞の最後は、思わず漏らしてしまったうめき声で掠れていた。

私は美佐子の肩を掴んでいた手を、自分の尻を鷲掴みにしている彼女の手を重ね、その重ねた手を支点にして腰を大きく前後に振る。

肉壁の狭間から剛直をその先端が抜け出す手前まで引き出し、そして再度深く突き入れる。そんな動きを繰り返すうちに彼女の肉穴が淫らかな音を発しはじめる。

美佐子が必死で声を押し殺し、尻を掴む手の指が私の手の下で白くなる。

私は更に動きを早めていく。

一度射精している分、私のピークは美佐子のそれより一瞬遅れた。

その瞬間彼女は押さえ切れずに大きな叫びを上げ、肉穴が白濁を渴望するように激しく蠢く。

その締め付けと快感に私は一瞬の間だけ耐え、そして声にならないうめきと共に、今日二度目の白濁を彼女の中に注ぎこむ。

熱い飛沫を身体 of 最深部に受けた美佐子が甲高く、途切れた声を上げた。

そして私はその彼女の絶頂の声と射精の快樂の中で、何故か、優香の姿態を脳裏に思い浮べる。

射精後の虚脱感のある余韻を楽しみながら、美佐子の胸に手を回す。優しく揉み上げながら、首筋に唇を這わせていく。

微かな汗の塩気とともに、彼女の乱れた息が感じられる。

美佐子の尻を挿んでいた手から力が抜け、脱力した身体を支えるように樹を挿んだ時、剛直が抜け出た後の肉壁の狭間から、私の白濁と彼女のしたたりが混ざり合ったものが糸を引きながら地面にしたたり落ちていった。

私と美佐子の痴態の一部始終を、他の一組の視線が捉えていた事を、ポケットティッシュを使って後始末をする私達が知る事になるのは、この数日後の事だった。



よく人は言う、一人暮らしは寂しいと。確かにそれは事実である。しかし同時にそれは自由をも意味している。

そして、自由とはそれを充分に活用する事の出来る者にとっては貴重なものであり、それを活かす事の出来ない者にとっては苦痛とも成りえるものである。

人はある時期にそれぞれの生き方を選択する。自由とそれに伴う孤独を選択する者、一定の束縛と他人との協調を選ぶ者。そして美佐子は自由を選択したのだった、自由故の孤独を。

だがその選択は彼女の心にある時は血を流させもした。そして彼女はそれを受け入れた。何が自分にとって一番必要であるのかを知っていたからである。

美佐子はドアの鍵を開け、明りがついたままの自分の部屋に入る。

外出する時に、部屋の電灯をつけたままにする習慣はいつからはじまったのだろう。そう、それは多分、この街で一人暮らしをはじめてから、最初に生理がきたあの日からだったように思う。

環境の変化もあつたのだろう、いつもより憂鬱さがひどく、自分の孤独さが強く意識されたあの日。この部屋で初めて、もの悲しさ泣いたあの夜から。

公園で彼に抱かれてから数時間が経っていた。

あの後再び一緒に入ったバーで、軽く飲んだウイスキーの酔いも、帰りの電車の中でその殆どが醒めてしまっている。

美佐子は外出着を脱ぎ、下着姿のままバスルームに向かう。これも気軽な一人暮らしでの習慣

だった。

ブラジャーを取り、脱衣所に置かれた洗濯機に入れる。パンティを脱ぐ。股の部分が男の精液で汚れていた。ティッシュで拭いただけでは取れない、膣内から漏れ出たものだろう。

彼女は公園でのセックスを思い返す。自分の中に受け入れた男のものの動きを、その（動き）によって生じた快感を。そして、男が射精した時に身体の奥底で味わった充実感にも似た感覚を、男の白濁の味を。

美佐子は下半身のその最深部に（疼き）を覚える。

下着に付着した精液に人差指で触れる。冷たく不快だったが、不思議と不潔感はない。

下着を洗濯機に落としこむ。

精液が付いた人差指を親指と合せ、離す。ぬめりがその二本の指の間で細い糸を引く。

（疼き）が欲望に変質する。

その欲望を意識しながら彼女は考える。自分は俗な言葉を使うなら淫乱なのではないかと。普段は別にそれ程、肉欲に悩まされるなどといった事はないが、一旦何かのきっかけがあった時には歯止めが効かなくなるように思う。そう、例えて言うならば（スイッチが入った）とでも表現すれば良いのだろうか。

この性癖は昔からの事だった。まだ子供といっても良い学生の頃、初めて男と唇を合せた時から。いや、それまでは、ただ単にその事に気付かなかっただけかもしれない。

美佐子は手を下腹部に伸ばし、縮れた陰毛を、まるでその手触りを楽しむように、ゆっくりと撫で回しはじめる。中指をその奥に伸ばし、快楽の尖りに触れる。軽い快感が生じるなか、精液で汚れたままの指が乳首をまさぐりだす。切ない息が唇から漏れる。

指を曲げてその奥に差しこむと、柔かく暖かい肉壁が感じられ、既にその内側のぬめりは数時間前の残滓ではなく、新しいものだった。

美佐子は男を受け入れている時のように股間の筋肉を窄める。膣全体が指に絡み付くように圧迫した。それは男に快楽を与え、その発する精液を求める女の本能的な動きだ。男をその中に捕らえたいという女の動きだ。

彼女の欲望が更に昂ぶっていく。

美佐子が膣にもう一本、人差指を挿入する。二本の指が更にきつく締め付けられ、押し開かれるような、ちょうど男のものが十分な愛撫の後に挿入されて来た時のような、充実感にも似た感覚を覚える。

息が乱れだし、そのリズムに合わせるように揃えた二本の指が股間で前後しはじめる。透明なしたたりが指をはい下りていった。

美佐子はしばらくの間自分の指を楽しむ。

抜き出した指には自分のぬめりとわずかに膣の中に残っていた男の精液が付着していた。

美佐子が欲望をその身体に留めたままバスルームに入る。

頭からシャワーを浴び、全身を濡らしてから、手にとったボディシャンプーを胸に塗り付けていく。

それは身体を洗うと言うよりも既に愛撫であった。泡立った両手がなめらかに撫でまわす度に乳房が柔らかく歪み、その肌の上では細かい泡が弾け散っていく。

脱衣所で既に火がついていた彼女の身体はそんな刺激にもすぐに反応した。

ボディシャンプーでぬめる乳房を撫で回している手に、固くなった乳首が触れる。

彼女は壁に掛けられたシャワーの湯の勢いを強めると、それを手に取り、そして横にあるバスタブの縁に片脚をかける。

股間が、既に欲情している股間が大きく開き、彼女はシャワーをその開いた脚の付根、秘部の付近に持つて行き、湯を浴びせかける。

強い勢いの湯の矢が、彼女の開いた肉髷の奥に、その内側の敏感な粘膜に、そしてその下の小さな窄まりに浴びせかかり、愛撫する。

それはまるで、鋭くはあるが痛みのない数百本の針が秘部に突き刺さつて来るような感覚を生んだ。

普段よりも強い快感に、美佐子は耐え切れず声を上げる。

シャワーによる刺激を味わいながら、彼女はシャンプーをまぶした逆の手を後ろに回し、背後の窄まりを捉える。そのまま狭い肉の輪を押し広げるようにして指を浅く潜りこませ、ゆっくりとかき回すように愛撫しはじめ。

美佐子の顔が苦痛にも似た表情に歪む。

シャワーの秘部への刺激と、指で觸るもう一つの窄まりへの刺激によって、彼女は急速に昇りつめていく。

シャワーが次第に、より強い刺激を求めるように股間に近づき、その後ろの窄まりにもう一本の指が押しこまれる。窄まりを中心にして鈍い苦痛が走ったが、それが又彼女を駆り立てる。

二本の指が大きく前後しはじめる。

美佐子の腰が小刻みに震える。彼女は二つの個所からの快樂によって絶頂を迎えようとしていた。

もっと強い刺激が欲しくなる。シャワーを床に投げだし、指で快樂の尖りを思うままにこね回し、深く挿し入れた指で奥の個所をかきまわしたくなる。

だが彼女は今のシャワーによる刺激を、耐え切れなくなるまで我慢した後訪れる絶頂感は、

より強いものである事を知っていた。

まどろかしさに耐える彼女の唇が歪み、歯が噛み絞める。

そしてそれが遂に彼女に与えられた時、美佐子は快感の声をはり上げ、その全身を硬直させる。

暫しの究極の一瞬を味わった後、彼女は床に膝を付く。

止っていた息が緩やかに漏れだし、激しい絶頂感が、そのピークの後の緩やかカーブを描いて収まっていく。

張り詰めた筋肉が次第に弛緩していく時の彼女の顔は、まるで痴呆のように緩み、シャワーが激しく尿道を刺激した為だろうか、余韻の中で美佐子は少量の尿を漏らしていた。

床に落ちたシャワーから吹き出す湯が、そのしたたりと混じり合っているだろう尿を、流し去っていく。



脱衣所でドライヤーを使って髪を乾かし、バスローブを羽織った美佐子が、机の上のワープロのスイッチを入れる。

キーを操作し、いつも仕事で使用している場所とは違ったディレクトリに降りる。

通常はシークレット機能によって非表示となっている、そのディレクトリの名は、「P」BOX」であった。

美佐子の指が馴れた動きで文字を打ち出して行く。



今日も「彼」に抱かれた。「夜の公園」と言った、いつもと違う場所でのセックスは又、私に一つの新しい楽しみを教えたようだ。よく聞く「見られているかも知れない」と言ったスリルが刺激になると言う話し。あれはどうやら私にとっては事実だったようだ。

今日「彼」は合った時からセックスに飢えているように見えた。私は、外でのセックスに興奮していたのだろう、「彼」をそのギリギリまで追詰めてやろうと思いついた。わざとピークの直前まで「彼」を追いこみ、そして飢えている理由を白状させる。「彼」をそのように扱うのも又、一つの快感でもあった。

私の企み成功したようだった。口の中に「彼」が出した精液は、随分とその量が多く、もちろん私はその「彼」の精液を充分に楽しんだ。

そしてその後「彼」が私に要求した事、自分で自分の一番秘めた部分を「彼」の目に晒す事。私はその要求に答え、自分の尻を自ら開き、その全てを夜気に晒した。その時私は、はっきりと性器で「彼」の視線を感じ取っていた。開いて、その内部をさらけ出しているだろう膣を、尖りを見せているだろう陰核を、窄まりの内側までも覗かせて見せているだろう肛門を、私は強く意識した。

恥ずかしさが刺激となり私は更に興奮した。その開かれた股間を「彼」に触れてもらいたかった。舌で舐め回して欲しかった。だが「彼」は、すぐに私の内に押し入って来た。もちろん私には不満などなかった。「彼」を受け入れる事はいつの時でも喜びを感じる。

「彼」は私を抱きながら「告白」をはじめた。今日会社に入社した女性が、私と同じ香水をつけていた為に、興奮したのだと言う。

やはり私は怒るべきだったのだろうか？。これは「浮気」と見なすべきもののだろうか？ 私も少女ではない（悲しい事に）。だから「彼」が他の女に対しても欲情を覚える事は当然理解出来る（理解したい？）、だが「女」としての私には納得できるものではない。だが私は、不思議とその時「彼」に対して怒りを感じなかったのだ。

家に帰ってこうして「日記」をつけている今になってみると、その時の私の気持ち理解出来るような気がする。

「彼」が欲情を覚えたのは「彼女」に対してではなかったのじゃないだろうか、その欲望の対象は「彼女」の肉体であり、そしてなにより私と同じ「彼女」が着けていた香水に、だったのじゃないだろうか。つまり「彼女の匂い」と「彼女の肉体」を通して「彼」は「私」に欲情したのではなかったのか？

これはあまりにエゴイステックな考えなのだろうか？

*

美佐子は自分の打出した文章を読み返しもせずに保存し、ワープロのスイッチを切る。

彼女にとって今の文章は、後から読む為のものではなかった。自分の気持ちを整理し、自分の

精神状態を把握する為の彼女なりの行為であったのだ。そして又、彼女にとっては一種のカタルシスでもあるのかもしれない。

以下、次回へ